

平成28年度諏訪東京理科大学学位記授与式学長告辞

本日、卒業や修了の日を迎えられる学生、院生の皆さんに、まずは心から、お祝いを言いたいと思います。同時に、ご参列いただいているご両親やご家族の皆様にも、ここまで大切に育てて来られたお子様方が、今日を迎えられたことに、心からのお喜びを申し上げたいと存じます。また、本日は茅野市長柳平千代一様をはじめとする来賓の方々のご臨席を賜って、この卒業式を執り行うことが出来ますことを、厚く御礼申し上げます。加えて、学校法人東京理科大学からは、本山和夫理事長と、同窓会から石神一郎会長が参列しておりますことを、ご紹介させていただきます。

さて、みなさんが本学で学生生活を送られたこの4年間、あるいは6年間を振り返ると、東日本大震災の発生から間もない時期に当たりました。ですから、皆さんの在学期間は、日本の社会にとって、苦しい時代と重なりました。この様な困難な時にもかかわらず、ご家族の皆様には、ここにいる学生諸君を今日まで支えて頂いたことに、心からお礼を申し上げます。学生の皆さんも、ここに卒業できるのは、ご両親、ご家族の物心両面にわたるご支援のおかげであることを、よく心に留めて下さい。

さてここで、皆さんの入学以来のことを振り返って、二つのこととお話したいと思います。まず第一は、いわゆるグローバル化です。ちょうどその頃から、産業界のグローバル化の波が、教育界にも押し寄せてきました。本学でも、既に海外に展開しておられた地元企業のご協力を得て、海外研修をはじめました。皆さんの中でも、多くの人たちがそれに参加して、様々な経験をさせて頂いて、大きく成長して帰って来てくれたことは、大変うれしいことでした。

その他、英語村という企画もはじめました。これは、学内で、場所と時間を決めて、英語だけで話しをしたりゲームをしたりすることを通じて、自然に英語に慣れ親しんでもらおうというもので、皆さんの中でも、たくさんの人たちがこれに参加して楽しく英語を学んでくれたと思います。

ただ、ちょうどいま現在について見ると、アメリカに誕生した新しい大統領やイギリスのEU 離脱などがあって、グローバル化には見直しの気運があります。しかし我が国は、エネルギーも資源も食料も大きく海外に依存している国です。労働力について見ても、我が国の若手の人口が減っているのですから、これも様々な形で海外に依存して行かざるを得ません。ですから、これから実社会に出る皆さんは、ぜひ幅ひろく世界の動きを見て、積極的にグローバル化に立ち向かってほしいと思います。

この4年間に大きく注目された二つ目のことは、人口の減少と地方への大きな影響です。とくに、「地方消滅」という言葉が、皆さんの在学中に大きな話題となりました。いま、日本では国全体の人口が減少しつつあります。さらに、地方にとっての大きな問題は、人口が地方から都市部に移動していることです。もともとこれは、いま急に始まったことではありません。昔の人口統計を調べてみますと、いまから130年くらい前、ちょうど我々の母体である東京物理学校が設立されて5～6年経った頃ですが、その頃、人口が一番多い県は、東京ではなくて新潟県でした。東京は、4番目です。当時は、物資の輸送はまだ容易ではありませんでしたから、お米がたくさん採れる地域に、たくさんの人が住んでいた訳です。長野県の人口も結構多くて、8位で約百万人を越えていました。その後、130年が経ち、日本全体の人口は約3倍に増えました。。もし、長野県の人口もその割合で増えていたとすると、いまでは百万人の3倍、すなわち三百万人になっているはずで

す。しかし今、実際には二百万人なのです。ですから、この差の百万人分は、長野県にルーツを持つ人たちが、東京、神奈川、愛知などの大都市圏に住んでいることとなります。いま全国的に活躍している方々でご自身や親の代が長野県にルーツを持つ方々は大変多いことに気付きますが、その原因は、こういう事情であることがわかります。これらの方々は故郷を応援してくれますから、こういう人たちを生み出すこともむろん重要です。

しかし、これからの時代では、事情が大きく異なってきました。これまではなんと言っても、人口は全体として増えていたのです。しかし、いまはちがいます。全国の人口も平成二十年頃から減りはじめましたし、長野県のとくに若い働き手の人口は、すでに平成の初めから減りはじめています。このことを、わかりやすい言葉で表現したのが、「地方消滅」でした。

わたしたちの世代は子どもの頃から、日本は国土が狭く、資源もなく、そのうえ人口が多いから貧しいのだ、と教わって育ちました。国土が狭いこと、そして資源のないことは、いまも変わりません。特に、石油や石炭がなく、しかも太陽光や風力のような自然エネルギーも、国土が狭いための制約に直面しています。しかし、人口については、まったく認識が変わっています。人は、実は、最も大切な資源であることがわかってきました。2010年にノーベル化学賞をもらった鈴木章先生は、北海道の海岸の小さな町で大変苦勞をしながら育った方ですが、「日本には資源がない、人と人の努力しか国を支えるものはない」と繰り返し言うておられます。これは、日本の国についてだけではありません。それぞれの地方においても同じことです。ですから、皆さんは、これからの日本の国とそれぞれが暮らす地域を支え、さらには、皆さんを育ててくれたご家族や皆さん自身の家庭を

支える、とても大切な存在なのです。ぜひ、このことを改めて心に留めて、社会に出て行ってほしいと思います。

さて、このような中で、大学として出来ることは何かと考えたとき、それは第一には、よい学びの環境を提供して若い人を集め、よい人材を世の中に送り出すこと、さらには理系の大学である特長を生かして、よい働き場所を作るための技術を地域に提供すること、であろうと考えました。この基本に立って、地元自治体と協議した結果 得られた結論が、本学の公立化です。いま本学は、一年先の来年4月からの公立化を目指して、地元自治体と共にその準備を進めています。公立化後の名前は、「公立諏訪東京理科大学」となる予定です。したがって、諏訪東京理科大学の名前も残してその伝統をしっかりと引き継いでいきますし、東京理科大学との連携も一層強めてゆくことが合意されています。教育面でも、地元産業界のご要望に従って、新しい科学技術に力を入れつつ、マネジメントの教育も守って参ります。わたしたちも、この大学を一層発展させるために力を尽くしますから、社会に出た皆さんも、ぜひ応援して頂きたいと思います。

さて、最後にこの地域での最近の明るい話題に触れたいと思います。このところ、女子スピードスケートの小平奈緒さんの名前をよく聞くとおもいます。今シーズンのワールドカップでは、五百メートルで、出場した全試合で優勝して、世界の頂点に立ちました。小平奈緒さんは、この大学のすぐ近くで育ち、豊平小学校から北部中学校で学びました。

女性の年齢を言うのは気が引けますが、小平さんはいま30歳というスポーツ選手としては決して若くない年齢です。でも、ここにむかって、常に自分を引き上げてきた人です。中学校時代には、高校生が主体の全日本ジュニア選手権で史上初の中学生優勝を成し遂げて、大きな注目を集めました。しかし、その後の道のりは、決して順調ではありませ

んでした。まへのまえ冬季五輪のカルガリー大会では、パシュートという団体戦で銀メダルは獲得したのですが、個人種目では表彰台に立てませんでした。まへのソチでも500mで5位と、表彰台には及びませんでした。そのときすでに20代の後半でしたから次のオリンピックはどうされるのかと思っていましたが、二年間オランダに武者修行に出かけ、帰国してから再度調整を重ね、今年的好成績につながりました。

私には、小平奈緒さんのことを聞く度に思い出す言葉があります。中学生時代に高校生を破って全国優勝したときには、「彗星のように現れて優勝した」と言われたのですが、この言葉が、小平さんはいやだったそうです。「突然現れたと言われるのがいやだった、それまでもずっと練習をしてきた、この成果はその結果だった」、と言っています。なにかを成し遂げた人は、突然に成し遂げる訳ではありません。それまでの、長い努力があります。しかも、ただ努力するだけではなく、正しい戦略にしたがって努力した人がさらにまへへ進めます。小平さんも前回のオリンピックの後の困難なときに、オランダに行って新しいトレーニングを受けるという苦しいが効果的な方針を立てて、それを実行しました。

最近の言葉としては、「他の人と比べたら、スロー再生のような競技人生だけれど、着実に一步一步歩んできた。これが自分らしい歩き方だと思っている。」と言っています。そして世界の頂点に立った今も、「昨日の自分を越える」と自分に言い聞かせているそうです。皆さんも、ぜひ、努力を続けることの大切さ、しかもしっかりした方針をもって努力することの大切さを心に留めて、巣立って行ってほしいと思います。しかし、努力は報われるとより美しく輝きます。来年のピョンチャンで小平奈緒さんの努力が報われること、そして今日卒業する皆さんにとっても、これまでのそしてこれからの努力が、ぜひ報われることを、心から願っています。

最後に皆さんにお願いしたいことは、卒業した後も、機会あるごとに美しい八ヶ岳山麓にあるこの大学を思い出して、訪れてほしいと言うことです。そうして、実社会での経験を聞かせて下さい。この大学も少しでも皆さんのお役に立つことが出来ると思いますし、卒業後の実社会での体験を聞かせてもらうことは、私たちにとっても大きな糧となります。今後本学も、皆さんと共に、一步一步着実にまえに向かって歩んでゆきたいと思いをします。

では、最後にもう一度、今日のご卒業を心からお祝いして、私の告辞といたします。

平成二十九年三月二十三日

諏訪東京理科大学 学長

河村 洋